

ある日、ふりつ子悪役令嬢になりまして。

登場人物紹介

フラウ

本来の乙女ゲームのヒロイン。
現在は囚われの身で、
脱出の機会を窺っている。

オーレリア

本来の乙女ゲームでは
悪役だが、今は
気のいい女の子。
中身は55歳の
おばちゃん。

ライガ

ロイスの従兄弟。最近は
ロイス達と協力関係にあり、
何かと助け舟を出してくれる。

ロイス

ガーネット国の王子。
婚約者となったペアトリクスを
気遣いつつ、国のために奮闘中。

アシル

カミーユの幼馴染で、
ロイスの腹心。
ちょっぴり嫉妬深いけれど、
カミーユにとっては
いい旦那様。

フィオル

トライアの腹心の部下。
ゲームとは異なり、
なぜか女性の姿をしている。

トライア

トバージェリア国の第二王子。
フラウ達を利用して
革命を扇動している。

カミーユ

ゲームにおける悪役侯爵令嬢だが、
今の中身は元女子高生の愛美
アシルと結婚したものの、
魔法オタクと中身の残念さは
あまり変わっていない。

1 ハートのQ ジョーカーに再会する

城の窓の外では、赤や黄色の葉をつけた背の高い木が白らの姿を誇るかのように大きく枝を広げている。季節はすっかり秋だ。

この世界には、元の世界と同じ四季がある。私がこちらへ来て十二年。その間に大切な人々が出来た。

少し肌寒くなつた城の中、私——カミーユ・ロードライトは、「白」の魔法使いの制服である真っ白なローブを着込み、王太子であるロイス様の隣で護衛業務にいそしんでいた。念願叶つて彼を守る魔法使いとなつた私は、今日も張り切つて任務を全うしている。

この国、ガーネット国に仕える魔法使いには、元々三つの役割が存在していた。

王族の護衛を行う「黒」の魔法使い。

新種の魔法やアイテム、薬の開発を行う「青」の魔法使い。

モンスター退治など、その他諸々の仕事を任される「赤」の魔法使い。

先日、王族を守るはずの「黒」の魔法使いが、王太子であるロイス様を襲う事件があつた。

当然、私は「黒」の魔法使いの責任者である「黒」の長官に苦情を言いに行つた。だけど、「黒」

の長官は「優先順位は王太子よりも王が上だから、ロイス様になにかあっても知らない」「裏切り行為は私の^{あずか}与り知らないこと」などとのたまたまつたのだ。

いくらエリート職である「黒」の魔法使いの数が少ないからといって、それはないだろう。しかし、「黒」の長官は私の生家であるロードライト侯爵家と同じくらいの身分を持つた大貴族だ。魔法使い達を束ねる魔法棟全体の長官である父も、彼の扱いに困っていた……「黒」の長官の背後に王様がいるとなれば尚更だ。

そこで新設されたのが、王太子であるロイス様と、王弟の息子であるライガを中心に護衛する「白」の魔法使いだ。私は父、シャルル・ロードライトからその責任者——「白」の長官に任命されたのである。

思えば、今まで様々な出来事が起つた。

日本の女子高生だった私が高校の階段から落ちて、乙女ゲーム『キャルト・ア・ジュエ』と似た世界へトリップし、ぶりっ子悪役令嬢のカミーユになつてしまつたこと。ガーネット国の王太子ロイス様と知り合い、彼の護衛になつたこと。そして、ゲームの中で彼女を^{ほめ}破滅させるキャラクターであるアシルと仲良くなり、結婚までしてしまつたことなど数え上げべきりがない。

「カミーユ、新しいお菓子を入手したんだけど、食べない?」

書類仕事をしているロイス様が、キラキラした笑みを浮かべて私に話しかけてきた。彼は私の幼馴染であり、ゲームの恋愛攻略対象の一人だ。

金髪で碧の瞳を持つ王子であるロイス様は、その場にいるだけで周囲を華やかにさせる。

「ええと、食べたいですが……いいんですか？ 私、護衛なのにこんなに自由にしていて」「いいんだよ、しかるべき時にきちんと守ってくれるなら」

「……じゃ、遠慮なくいただきます」

私は、ロイス様付きのメイドが用意したカラフルなクッキーを齧^{かじ}る。

こういう場面だけ見れば平和だけれど、私が「白」の魔法使いになつてからも何度もロイス様のもとに刺客が現れたので、気を抜いてはいけない。ロイス様は王の嫡子だが、実の親である王に命を狙われているのだ。

不意に、コツコツとなにかが部屋の窓を叩く音がした。

「なんだろう？ 私が確認しますね」

危険があるので私が窓に近寄り、ロイス様の周囲に防御用の魔法の壁を張りつつ窓を開ける。

窓の外にいたのは、銀色の翼を持つ小さなフクロウだった。くるくると動く金色の瞳が可愛らしい。キヨトンと小首を傾げた銀色のフクロウは、折りたたんだ手紙を咥えている。

「手紙？ ロイス様宛^あかな？」

私は警戒しながら手紙を受け取り、中を確認した。フクロウは私が手紙を受け取ったことを確認すると、光になつて消える。どうやら伝達魔法の一種だつたらしい。

綺麗な文字で綴られた手紙は私宛で、差出人は意外な人物だつた。

——親愛なるカミーユへ

元気にしていますか、あれから変わったことはありませんか？

中立の立場にいる僕ですが、争いとは無縁のことならば、いつでもあなたの力になりますよ。

僕は、すべての美少女キャラの味方です。また学園へ遊びに来てください。

王立魔法学園長より——

「魔法学園の学園長からだ……すべての美少女キャラの味方ってどういう意味だろう？」

学園長も、ゲームの恋愛攻略対象——しかも隠しキャラである。

彼は膨大な魔力を持つ魔法の使い手で、エンディングによつては、学園の生徒達を惨殺するという危険なキャラクターだった。

しかし、現在の彼は私と同じく日本で生活していたのにゲームキャラクターと入れ替わつてしまつた、平和を愛する人物。そんな彼は時々意味のわからない言葉を使う時がある。そもそも、男性なのに乙女ゲームの知識があるみたいだし、学園長はちょっと変わつた趣味を持つ人物なのかもしない。ここは、詮索しない方がいいだろう。

「カミーユ？ どうしたの？」

後ろから声をかけてきたロイス様に向き直り、私は手紙の内容を告げる。

「へえ、学園長が」

「聞きたいこともたくさんあるので、彼にまた会いたいのですが……一度アシルに確認してみます。

以前、勝手に会いに行つて大変なことになつたので

少し前、こつそり学園長に会いに行つた私は、それを知つたアシルから恐ろしい追及を受けたのだ。彼はやや嫉妬深いところがある。

けれど、収穫もあつた。学園長はゲームヒロインが関わる平民過激派ではなく、彼独自の考えによつて中立^{つらぬ}を貫いているとわかつたのだ。こちらの仲間にはなつてくれないものの、敵に回らないことが確定した。

「それがいいね。彼の独占欲つて、ちよつと度を越えていいから」

ロイス様は碧色^{みどりいろ}の目を細め、面白がるようにくすくすと笑つた。

「悪かったですね、度を越えていて」

部屋の扉の方から突然聞こえてきた声に、私とロイス様は思わず顔を見合わせて固まる。

すると、大量の書類を抱えたアシルがメイドに案内され、入室してきた。

「それだけ、俺のカミーユへの愛は大きいんですよ、殿下」

キャラメル色の髪に、コバルト色の瞳。アシルは、いつものポーカーフェイスで恥ずかしげもなくそんなセリフを言い放つ。ロイス様と同じく幼馴染^{むさなじが}の彼は、今では私の夫だ。

それにしても、ゲームでは私——カミーユを徹底的に破滅させるキャラクターだった彼と、こんな関係になるなんて……世の中、なにが起ころかわからない。

ロイス様はキラキラした笑みを浮かべながら、堂々としているアシルと、恥ずかしがつて縮こまる私を見比べていた。

「ところで、カミニュ。学園長からの手紙つて？ なんて書かれていたの？」

「アシル！？ どこから聞いていたの!?」

ロイス様に続いて、最近はアシルも隠密スキルを磨き始めたようだ。本当に、やめていただきたい。私は驚きつつも、アシルに手紙の内容を説明する。

「学園長が、『また学園へ遊びに来てください』だつてさ。私としても、いろいろ魔法関連で聞きたいことがあるし、行ってみたいんだけどなあ。でも、前の時にアシルがねえ……」

「カミニュ……あの時は俺もやりすぎた。今回は止めないよ。その代わり俺もついていいい？」過保護ゆえに時に暴走しがちなアシルは、前回のことを見直して反省している様子だ。私はそんな彼に頷き、言葉を続ける。

「じゃあ、数日中に。護衛の仕事が終わつたあと、学園長のところに行つていいかな」

「わかった、予定を空けておくよ」

そう言うと、色っぽく目を細めたアシルは、音を立てて私の頬に口づけた。

「二人とも、見せつけるのもほどほどにしてね」

全くもつてその通りだ。他の人間がいる前で恥ずかしい。

私は肩を竦めつつ、赤く染まつた頬を隠して真面目に王太子の護衛を再開したのだつた。

そして、その数日後。

護衛の仕事を終えた私は、同じく仕事を終えたアシルと共に魔法棟の一室にいた。ここから魔法

で学園長のもとへ移動するのだ。

前に会つた時に、学園内の彼の部屋付近に仕込んでいた転移魔法陣を作動させる。今日向かう旨ねは、あらかじめ伝達魔法で送つておいた。

相変わらず魔法書や魔法アイテムまみれの部屋にお邪魔した私は、学園長にアシルを紹介する。とはい、アシルも学園の生徒だったのだが、学園長が引き籠つていたこともあり、まともに対面したのはこれが初めてだ。

「本当に来てくれた……」

細かく編み込んだ長い銀髪を垂らし、教職者の衣装に身を包む学園長。彼は金色の瞳で私をじつと見つめていたが、アシルのわざとらしい咳払いを返つた。

「ぎよ、今日は、魔法について聞きたいことがあるんでしたね」

「はい。魔力を增幅出来るような魔法を知つていたら、教えてほしいなあと思つて」

学園長は何度か瞬きを繰り返してから、いそいそと周辺にあつた魔法書をかき集め始める。彼は数冊の魔法書を手に取ると、不意に手を止めた。

「そういえば、僕もカミニュに見せたいものがありました」

「見せたいものつて？」

最近、この「見せたいものがある」というパターンが多い気がする。確かに、ロイス様の婚約パートナーの際に、トライアもそんなことを言つていた。けれど、その時はアシルに言い含められてい

たこともあり、彼について行かなかつたのだ。

私がロイス様の婚約パーティーでの出来事に思いを馳せていると、学園長が奥の戸棚から白い楕円形の物体を取り出してきた。それには、非常に見覚えがある。

「これつて……もしかして」

学園長の手にあるのは、かつていた世界にあつたゲーム機だつた。ボタンの下には、黒のサインパンで「一葉」という名前が書かれている。

「学園長の元々の名前は確か『三郎』だつたよね？」一葉って誰だろう？」
「僕にもわかりません。これは、僕がこちらの世界に来た当初に拾つたものです。中に『キヤルト・ア・ジュエ』のソフトが入つていました」

そう言つて、彼は私にゲーム機を操作するように促す。けれど……

「あの……でもコレ、電源が入らないよね？」

この手のゲーム機は、充電しないと電源が入らない仕様なのだ。そして、この世界にはコンセントなどという便利なものはない。

「この部分に微弱な電流を流せば大丈夫。強さは、これくらいですかね」

「それで動くの？」

学園長が魔法で電流を流して電源を入れると、数秒後に画面が白く光つた。懐かしい軽快な音楽が響く。

「動いた！」

私の隣にいるアシルも、不思議そうにゲーム機を覗き込んできた。

「カミーユ、これはなに？」

「えーと、私の世界にあつた魔法アイテムみたいなものだよ。こうやつて弱い雷の魔法を流すと、動く絵が出てくるんだ」

こちらの世界風に変換した言葉で、私は彼にゲーム機の概要を伝える。

「この魔法アイテムは物語を流す絵本のようなもので、前に私がアシルに説明した、フラウが主人公の話が読めるの」

フラウは、例の乙女ゲームのヒロインだ。彼女も私と同じ世界から来たらしい。

シナリオと違う世界を嫌う彼女は、悪役令嬢に成り代わつた異質な存在である私や、シナリオとずれた行動をとる攻略対象達に憤りを覚えていた。

また、ガーネット国の王族や貴族に恨みを持っているため、平民過激派という組織に身をおいて、革命によつてこの国を転覆させようと自論んでいた。

過去にフラウは、私とアシルを引き裂くため、幻覚の魔法をかけてきた。その時に、アシルとロイス様には私が異世界から來たことを伝えてある。

「あの幻覚魔法と同じ内容の物語が、その魔法アイテムに映し出されるということ？」

「そう、声付きでね」

そんな彼の後ろから、学園長がひょっこりと顔を覗かせた。

「カミーユ、この中には全ルートがクリア済みのデータが入っていました。最初に出てくるメニューメニューで回想モードを選べば、好きな話を見ることが出来ますよ。よければ私が魔法書を探す間、それで遊んでいてください」

私達はゲームをしながら、別室に魔法書を探しに行つた学園長を待つことにした。

オープニングの画面を見たアシルが、初っ端から固まる。

「……ロイス殿下とライガ様がいる」

「うん、彼らも登場人物だからね」

オープニングの画面には、ヒロインを中心としてその周りに恋愛攻略対象のK達が並んでいる。このゲームは特朗普をモチーフにした世界観で、Kの他にも恋敵であるQ、友情攻略対象であるJというキャラクター達もいるのだ。

ちなみに、ロイス様達の横がトライアと、お尋ね者のアサギだよ……トライアは、まるで別人みたいだけど

画面の中のトライアは、あかがねいろ銅色の短髪にガツシリとした筋肉質な体で、アクセサリーはシンプルで小ぶりな金のピアスのみ。キャラチャラジャラジャラした今の彼との共通点は見つからない。

私はゲーム機のボタンを操作して回想モードを選択する。そのモードでは、クリアしたルートの物語をいつでも見られるのだ。

この世界と日本の文字は共通なので、アシルも画面の文字を読むことが出来た。

「アシルは、誰のルートが見たい？」

「ルート？」

「……ええと、誰が主人公の恋人になる話を見たい？」

しかし、アシルは恋愛以外の部分が気になつたようだ。

「カミーユは登場しないの？」

「……わ、私は主人公のライバル役だから、オープニング画面には出てこないんだ。ロイス様が主人公の恋人になる物語を選べば、途中で邪魔しに出てくるよ」

「じゃあ、殿下で」

それでいいのかという基準で、アシルはあっさりとルートを選択した。私達は、一緒にハートのKのシナリオを見る……とはいえ、以前フラウに幻覚魔法を食らつた際に、アシルはその一部始終を目にしているのだが。

そうこうしているうちに、学園長が部屋に現れた。彼が手にしているのは使い込まれたノート。どうやら自筆の魔法書らしい。

「まず、これを読んでみて。わからないところがあれば言つてください」

「ありがとうございます、学園長！」

私が魔法書を読みふける間、隣ではアシルが乙女ゲームをしている……なんて奇妙な光景だ。

『その貧相で醜い平民さん！？ 嫌だわ、ロイス様に纏わり付かないでもらえるかしらあ？ しつしつ、あっちへお行きなさい』やや鼻にかかつた、ゲームのカミーユのぶりっ子ボイスを耳にして、とても複雑な気分になつた。

ゲーム機から聞こえてくる自分と同じ声を無視しつつ、私は魔法書を読み進めていく。魔法書には、複雑な魔法の手順が学園長の丁寧な文字で綴られていた。

夢中になっている私に、学園長が少し離れた場所から声をかけてくる。

「大丈夫ですか？　これを読んで、わかりますか？」

理解出来るかどうかに関しては問題ない。なにせ、私は幼少のころから父の所有している難しい魔法書を読み漁ってきたのだ。

「うん、魔法については大体わかったよ。こんな方法があつたんだね……」

やはり、学園長は凄かった。彼の魔法の読み解き方は、ある程度魔法に詳しい私にとっても斬新と思えるものだ。

元々の入れ替わり前の学園長のスペックのおかげでもあるのだろうが、彼はきっと私と同等――いや、それ以上の魔法オタクである。

私は魔法書を見ながら、順を追つてドーピング魔法を実行してみた。ちょっと複雑だけれど、思つたよりも楽に魔力を上げられそうだ。

この魔法は、体の中にある魔力の制御が大事になつてくるらしく、以前アシリに特訓された使用魔力量の節約技術が活きてくる。

「カミーユ、その魔法を使えるのは一日一回、一時間までです。それ以上は体に負担がかかりますので、一時間経つ前に絶対に魔法を解いてください」

「うん、わかつた」

学園長の注意事項を聞き、私は素直に頷いた。基本的に、魔法は威力や効果が大きければ大きいほど、体に負担がかかるものだ。そして、外に放出する魔法よりも人体に直接使用するものの方が、危険度が上がる。

「これで、今の二十倍までは魔力量を增幅出来るでしょう。カミーユの魔力量は普通よりも少し多いくらいですから、この魔法を使うと一時的にフラウと同程度の力を持つことになりますね」

「本当!? ヒロインと互角にやり合えるの!?」

「……カミーユ。私は中立の立場ですから、フラウとの争い事に利用するのであれば、それ以上の魔法について教えることは出来ません」

「うつ」

「全く……嘘がつけない人ですね」

学園長はクスリと笑うと、私からサッと魔法書を取り上げた。

でも、今さらノートを取り上げられても、既に内容を覚えてしまつていて。学園長の考えついた理論を利用して、五つか六つの新魔法を編み出すことも可能だ。

彼だって、私にこのノートを見せた時点でそうなることは予想していただろう。

「ということは、もしかして――」

ちょっとだけ、学園長が羨妬してくれたのかもしれない……

そんなことを思つた私は、胸の奥に温かさを感じたのだった。

「よければあのゲーム機も、しばらくお貸ししましようか？」

学園長が、アシルの持つているゲーム機を指差して尋ねる。

「いいの!?」

「ええ、私は何度も内容を確認しましたから」

学園長の申し出は、私にとつてありがたいものだった。これで、隠しルートの内容をじかに確認することが出来る。以前いた世界でプレイしていたゲームではあるが、隠しルートまでは遊んでいないのだ。

「ありがとう。また返しに来るね」

私が笑つて頭を下げる、学園長は強く握り締めた拳を空へ上げた。小声で「美少女キャラ万歳」と言つたのが聞こえたが、やはりその意味はわからない。

しかし、魔法書はもちろんゲーム機まで快く貸してくれるなんて、学園長がいい人だということは間違いないだろう。

城の中の自室にゲーム機を持ち帰った私は、さつそく隠しルートを確認する。既にハートルートの回想を見て見ているアシルも一緒だ。

回想モードから隠しルートを選択すると、画面の中にヒロインであるフラウが映し出された。現実の彼女を見てしまつたからだろうか、以前ほどヒロインに愛着が持てない。

私達は隠しルートの内容を流し読みする。

私と同様にこの世界にトリップした、元乙女ゲーマーのベアトリクスが言つていた通り、開始直



後からヒロインが男性キャラクター達に言い寄られる逆ハーレム状態が始まった。ロイス様も盛んにヒロインにアプローチしているようだし、ライガも俺様な感じでヒロインに迫っている。キダ^{シヤクダ}ではなく、J達までもが、次々にヒロインにアタックしていた。序盤から、かなり激しい展開だ……「あ、アシルも出てきた」

ゲーム画面の中のアシルも、例に漏れず熱心にヒロインへ話しかけていた。

本人を知っているだけに、ゲームの中の彼の笑顔には胡散臭さしか感じられない。

『この国はもうダメです』

画面の中のアシルが、ヒロインに向かつて呟く。

『どうしたことなの?』

『ガーネット国の上層部は、腐敗が進みすぎている。一度すべてを淨化しないと、もう……』

『アシル』

『僕は殿下の力になりたい。そのためにはあなたの協力が……』

『ある意味アプローチだが……求愛というよりただの勧誘だ。ヒロインの魔力だけが目的に見える。』

『ん、待てよ……これって』

『状況などは異なるが、フラー^{フラウ}がアシルを勧誘しようとしていたのと同じじゃないだろうか。』

『ヒロインがアシルを勧誘したがつて、このルートのアシルの存在を知っていたから?』

『革命を起こしたいという自分の主張に共感して、力になってくれると思ったのかな。』

『その可能性もあるね、この前提があつたからあんなことを言つていたんだ。たかが物語に影響さ

れすぎだよね』

アシルはゲーム画面を眺めながら、そんな元も子もないことを言つたのだった。

ここガーネット国には二大派閥^{はばつ}があつた。

国王派と王弟派——双方は周辺の貴族達を巻き込み、常に王位争いを繰り広げていた。国民の生活は二の次三の次……どころか、内政が汚職にまみれている。

この状態を見かねたロイス様達は、先日行われた彼の婚約パーティで、王弟を始めとする不正を行つていた貴族達を、派閥を問わず一掃した。

そのおかげで現状、城の王弟派はほぼ全滅。国王派も肅清^{しゆくせい}されたものの、王弟派よりは優勢である。

だが、中心となつていた者達が捕らえられ、また国王の息子であるロイス様と王弟の息子であるライガが協力体制を取つたことから、両派閥の不和は解消されつつあった。

今、城の中で多くを占めている中立派^{しゆうりつ}という存在も、それに一役買つていて。どちらにも与せず淡々と仕事を続けていた中立派は、殆ど^{ほとん}肅清されることなく生き残つてているのだ。なので、人員不足は否めないが、国の機能が停止することはない。

むしろ、風通しがよくなつたことで、業務が効率的に進むようになつたと評判だ。

これからロイス様が本格的に内政に介入していくれば、城内の職場環境もどんどんクリーンになつていくのだろう。

学園長に会った翌日、私とアシルはそれぞれの仕事でロイス様のもとを訪れていた。仕事の内容上、これからは夫婦で同じ場所にいることが増えそうだ。

珍しく仕事の最中にあくびを噛み殺すアシルに向けて、ロイス様が爽やかな笑顔で声をかけた。

「あれ？」アシル、今日は朝から眠そうだね」

そう言うロイス様も、隣室にいる婚約者のベアトリクスが気になるらしく、チラチラと彼女の部屋をデバガメする隙を窺っている。

ベアトリクスは、隣国トパージェリアの伯爵令嬢で、以前は第二王子であるトライアの護衛をしていました騎士——そして、私と同じ世界の出身者だ。彼女と私は、似たような立場ということもあり、同じ悩みを共有するいい友人となつた。

ベアトリクスは少し前に、彼女に一目惚れしたロイス様と隣国国王との取り引きにより、王太子の婚約者としてガーネット国にやつて来たのだ。だが、彼女はまだロイス様に対してどこかよそよそしい部分がある。いきなり婚約を決められて戸惑うベアトリクスの心情もわかるけれど、私としては、早く二人に仲良くなつてもらいたい。

そんなベアトリクスについて、悩んでいることがある。それは、彼女の元主あぶねじに関係することだ。婚約パーティーの日に地下牢で起こつた一連の事件——地下牢に捕らえられていた平民過激派達の口封じに来たフラウを取り逃がしてしまつた件である。私とアシルの調査により、彼女の脱出にトライアが関わっていたとあきらかになつた。

ベアトリクスはまだこのことを知らないのだが、いずれタイミングを見て伝えなければならない。

愛いとおしい女性が気になりすぎてよそ見をする王太子に目を光らせつつ、アシルは返事をした。

「ええ、ちょっとと確認しなければならないことがあります……寝不足なんですね」

なーにが、確認しなければならないことだ。徹夜でゲームをしていただけじゃないか!!

と、私は心の中で彼にツッコミを入れる。

私の心情など知らず、アシルは言葉を続けた。

「以前、カミーユの話していた物語についてなのですが、殿下にも確認していただきたくて」

「あの興味深い話のことかな？僕も気になるよ」

ロイス様の言葉に、アシルが懐からゲーム機を取り出した。

「これは、カミーユが以前いた世界の魔法アイテムだそうです。その世界では魔法は使えませんが、このような独自のアイテムが発展しているとか」

「凄いね！」こんな形状のアイテムは初めてだ！」

ゲーム機を手にしたロイス様は、碧色の目をキラキラと輝かせて興奮気味だ。

アシルは、ゲーム機を覗き込むロイス様に真面目な顔で操作方法を説明している。

「僕は、アシル達とは違つて話に聞いただけだつたから、実際に物語を知ることが出来て嬉しいな」

かなりご機嫌なロイス様は、昨日のアシルと同様に真剣に画面に見入っている。

「ところで、この話にベアトリクスは出てこないの？」

彼の疑問に、今度は私が答える。

「ロイス様、ベアトリクスはトライア様のルートで登場しますよ。隣の部屋の彼女とはだいぶ異なる性格ですけど」

てっきり、ロイス様は自分のルートを進めると思っていたのだが、彼はダイヤのKのルートを迷わず選択した。それ、ロイス様が破滅しちゃう話なんだけどな。

このルートでの彼は、ヒロインの力を巡って勃発したトパージエリアとの戦争に負ける。結果、王様は処刑され、ロイス様も暗くて冷たい塔の中に幽閉されてしまう。

以前、私は彼にそのエンドについて大まかに伝えてあつた。自分が酷い目に遭う物語なんて見ていて面白いものではないだろうに、ベアトリクスが見たいという気持ちの方が勝つらしい。

「それにしても、このトライアはまるで別人だね。例の犯人は、彼という線が濃厚なんだっけ？」

ゲームをしながら、ロイス様はアシルへ問いかける。アシルは彼の問い合わせた。

「ええ。ほぼ確定かと……しかし、その内容をベアトリクス様にお伝えしてよいものかどうか？」

「そうだね。出来れば伝えたくないけれど、そうもいかないだろうから……ベアトリクス、ショックを受けるだろうなあ」

こんな時でも、ロイス様は自分よりもベアトリクスの心配をしている。アシルは困った様子で彼の方を見ていた。優しすぎるこの王太子様は、自分の気持ちを後回しにする傾向があるのだ。

しかも、部下に弱みを見せようとしているロイス様は、私とアシルの前ではいつもよき主でいるため頑張ってしまう。もどかしいけれど、私達では彼の心を守りきるのには限界があった。出来るなら、ベアトリクスにその部分を補つてほしい――

そんな私の思いが届いたのだろうか。王太子の私室の扉をメイドが恭しくノックし、渦中の人物、ベアトリクスの来訪を告げた。

「ロイス、なにをしているんだ？　それは、ゲーム機!?　こ、この音楽は……」

現れたベアトリクスは、長くてまつすぐな黒髪を頭の上で一纏めにし、淡いラベンダー色の上品なドレスに身を包んでいる。ガーネットに来てから、彼女が男装する機会はめっきり減っていた。だが、女性らしい格好をしていても紳士的な彼女は、貴族のご婦人方や令嬢、城で働くメイド達に絶大な人気を誇っている。

ゲーム機を弄っている婚約者を見た未来の王太子妃は、困惑を隠せない様子だった。

なにしろ、この世界には存在しないはずのゲーム機があるのだ。その上、世の女性達に一番人気だつた攻略対象キャラが、ニコニコしつつ乙女ゲームをやっているだなんて……彼女の気持ちは察するに余りある。

「ねえねえ、ベアトリクスはこういう格好はしないの？　よく似合っているけどなあ」

ロイス様が、ゲーム機の画面を見ながらベアトリクスに話しかけた。

「こういう格好とは？」

首を傾げるベアトリクスに、ロイス様がゲーム画面を見せる。そこには、一枚のスチルが表示されていた。

「こ、これは！」

画面に映し出されていたのは、女子の取り巻きに囲まれ、地面に這いつくばるヒロインを見下ろ

している、悪女ベアトリクスの図だ。

ご丁寧に、その絵の下には白い文字で『このドブ^{ズブ}鼠！　トライア様に色目を使うなんて許せませんわ！　あなた達、その平民女に身の程というもの思い知らせて差し上げなさい！』などと書かれている。

未来的トパージェリア王妃になるという大きな野望を胸に抱く、ゲーム中のベアトリクス。彼女は伯爵令嬢の身分を笠に着た、高飛車で気の強い悪役なのだ。そして、トパージェリア風のセクシーアラビアンな衣装を着用していることが多い。カラフルな原色の布で胸元と腰周りだけを覆い、形ばかりの薄布を羽織^{はお}つている姿だ。また、トライア並みのアクセサリーを全身に纏^{まとい}っている。

「み、見ないでくれ！　そのベアトリクスは私じゃないけれど……なんか嫌だ！」

ベアトリクスが、慌てて抗議の声を上げる。

「えー……可愛いのに？」

ロイス様はキラキラした笑顔のまま、残念そうに肩を竦めた。

「カミーユ嬢、どういうことなんだ。何故、ロイスが乙女ゲームをやっている？　私達が乙女ゲーマーだという事実は知られているのか？」

ベアトリクスの丞先^{ほせん}が、今度は私に向いた。周囲を気にしつつ小声でこちらに詰め寄る彼女の頬は、少し恥ずかしかったのか赤く色づいている。

「あのゲームについては前にも話した通り、私の世界にあつた物語だと伝えてるよ？　二人は、令嬢向けの恋愛小説かなにかだと思つてる」

彼女の剣幕^{けんまく}に圧倒されながらも、私も小声でそう返した。

「カミーユ嬢つて、意外と強^{じき}かだよな……」

まだ顔の赤みが抜けないベアトリクスは、下を向いて唸^{うな}るように呟く。

「まあ、その話は置いといて……」

ベアトリクスも来たことだし、彼女にトライアの件を話さなければならぬ。

現状トライアのことを知っているのは、私とアシル、ロイス様、魔法棟の長官と副長官、つまり私の父とアシルの父のみだ。近いうちにライガには知られる予定である。

なにしろ犯人が隣国^{隣邦}の王子なので、うかつに広めて国内外に余計な混乱を起こすわけにはいかない。こちらが大々的に苦情を伝えても、隣国は絶対に自らの非を認めたりはしないだろうし、下手したら戦争になつてしまふ。

トパージェリアは國太く、のらりくらりと言い逃れることが非常にうまい商人の國なのである。「実は、ベアトリクスに言わなければならないことがあるんだ。地下牢の事件の件なんだけど……」口を開きかけた私だが、その最中にロイス様と目が合つて言葉を止めた。彼の瞳が「ちょっと待つて」と私に訴えかけている。長年つるんでいるためか、ロイス様に関しては、なんとなく伝えたいことを察することが出来るのだ。

予想通り、ロイス様は私に代わってベアトリクスに説明を始めた。

「ベアトリクス、カミーユの言つていた件で、君に伝えておきたいことがあるんだ。地下牢で兵を倒してフラウ・モニエを逃がした犯人がわかつたよ」

「そうか……それは良かった。犯人は誰だつたんだ?」

ベアトリクスは、彼の方に向き直ると真剣な表情で続きを促す。

「犯人は君もよく知っている人物で、その……」

ロイス様は、躊躇した様子で口を噤んだ。エメラルド色の澄んだ目が愁いを帯びている。アシルも、心配そうにロイス様の行動を見守っていた。

やがて覚悟を決めたのか、彼は口を開く。

「君の主だつた、トライア・トパージェリアなんだ」

ベアトリクスはなにを言われたのかわからないと言わんばかりに、キヨトンと首を傾げた。

それも仕方のないことだろう。私だつて、トパージェリアでトライアが事件に関わるもの購入していたと知らなければ、いまだに気付いていなかつたかもしれない。彼は完璧にその痕跡を隠して、なに食わぬ顔でロイス様の婚約パーティー会場をあとにしていたのだから。

「……若様が？ 冗談だろ？ あの方にそんなことが出来るはずがない！」

ベアトリクスは、戸惑つたみたいに頭を振る。そんな彼女を困り顔で見つめつつ、ロイス様が言つた。

「それが……証拠もあるんだ。ベアトリクスが気付いた魔力の痕跡の他にもね」

「そんな！ なにかの間違いではないのか!?」

「事実だよ。そのせいで、隣国で調査をしていたカミーユが狙われた」

それを聞いたベアトリクスが弾かれたように私を振り返つたので、曖昧に頷く。残念ながらすべ

て本当のことなのだ。魔法薬の材料を探しにいった先で、禁術をかけられた店主に捕らえられそうになつたのは記憶に新しい。

アシルの魔法アイテムのおかげですぐに逃げ出せたが、それがなければ大々的に一戦交えるしかなくなつていてことだろう。一連の国際問題が公になつてしまふところだつた。

「カミーユ嬢……」

ベアトリクスが縋るような目で私を見つめるが、私に出来ることは、彼女に事実を説明することだけである。

「トライアが、兵士達を昏倒させてヒロインと共に逃げ去つた犯人だつた。私も間違ひならないと思つたんだけど……仮に主犯じゃないにしても、彼がなんらかの形で関与していることが確実になつちやつて」

「だが……若様は超のつくヘタレだ。そんな大それた真似が出来るはずが……」

そう言いながらも、彼女は低く呻いて項垂れた。ロイス様が、うちひしがれる婚約者を優しく抱き寄せる。

私は空氣を読んで部屋の外へ移動し、なにかあつた時に彼らを護衛するため扉の外で待機することにした。アシルも私と共に、二人が落ち着くのを待つてゐる。

「ロイス様達、大丈夫かなあ」

私は、扉に耳をくつつけて中の様子を探る。うくん、よく聞こえないな……

そんな私に、アシルが後ろから呆れ声で言う。

「カミニュ……野暮な真似はしない方がいいよ」

「でも、ベアトリクスが心配だよ」

「大丈夫だよ。それに、魔力の動きや敵の気配があれば大体わかるだろう?」

キャラメル色の髪をかき分けながら、アシルがツカツカと私の方へ近付いた。

「カミニュがそこまで心配しなくとも、殿下だつて子供じゃないんだから。それでも、カ

ミニュはいつも殿下に付きつきりだし」

「……やっぱり、色々と気になるじゃない? つて、ふぎやつ!」

私の傍^{そば}に歩みよつたアシルが、いきなり耳に息を吹きかけてきた。

「ちょっと、ここ、ロイス様の部屋の前だよ? そんなことをしたら……うぎゃんっ!!」

しかし、彼は意に介することなく私を抱きしめて耳を蛭^{くちわ}える。耳たぶに温かい感触が伝わり、思わず色気のない声を出してしまつた。

「そんなに大きな声を出したら、部屋の中に響くんじやない? 俺は、忠告したからね?」

アシルは楽しそうに私の耳元で囁^{ささや}く。おのれ、そんなに色気を垂れ流すな!

私は振り返り、抗議の意味を込めて彼を睨^{にら}みつけたが、相手はどこ吹く風だ。

結局、ロイス様が部屋から出てきたころには、私は、熟^숙れたトマトみたいな真つ赤な顔でアシルに抱えられていた。それにしてもロイス様、かなり長い間ベアトリクスと部屋にいたなあ。

その後、私達は再び王太子の私室へ戻る。ベアトリクスは一旦落ち着いたのか、自分の部屋へ帰つたようだ。ロイス様とベアトリクスの部屋は、婚約者同士ということで扉一枚で繋^{つな}がつている。

「そういえば、カミニュ。オーレリア・トレーフルがうちの使用人を辞めたよ。実家を手伝うために、本格的に医療の勉強をするとかで」

ロイス様の部屋に戻つたアシルが、思い出したようにそう言つた。

オーレリアもまた、私やベアトリクスと同様に別の世界からやってきて、ゲームの悪役になつてしまつた人間だ。今は私と同い年に見える彼女だが、この世界に来る前の実年齢は五十五歳で、娘も一人いたのだとか。平民で町医者の娘であるオーレリアは、最近までアシルの実家であるジェイド家のメイドとして働いていた。

「ええっ!? オーレリア、ジェイド家のメイドさんを辞めちゃつたの?」

私の声に、ロイス様も反応する。彼には既に、オーレリアも私とベアトリクスと同じ世界の出身者だと話をしていた。

「オーレリアって確か、カミニュ達と同じ世界の出身の女の子なんだよね」

「そうです。その物語のアサギのルートに登場します」

「彼女は王都の学校に通うそうですよ。医療系の」

アシルも、ロイス様に説明を始めた。

「なんだ。オーレリアは医者にでもなるつもりなのかな」

私は、アシルに向けてそう尋ねる。

「どうだろ。この国の医者になるには、ある程度の魔法知識と医療知識、医療技術が必須だから。それに、医学を学ぶことが出来る学校はもの凄くお金がかかるよ? 王都の学校は、まだ良心的な

方だけれど。オーレリア・トレーフルの実家は、善良な診療所な分、裕福ではないみたいだし

「そつかあ……この世界でも、医者になるのは難しいんだね」

そんなことを話していると、ロイス様が私に向かって問い合わせてきた。

「ねえ、カミーユ。そのオーレリアという女の子も、この城へ呼んだ方がいいかな？ 彼女も、カミーユやベアトリクスと同じ世界の出身者でしょう？ あまり関わりがないにしても、フラウ・モニエが狙つたりしないかと思つて」

「……それは」

貴族嫌いらしいフラウは、平民のオーレリアには手を出さないかも知れないけれど、確実にそもそも言い切れない。彼女は原作と異なる状況を歓迎してはいないようだから、オーレリアを狙う可能性だって充分にありえる。

早いうちに彼女に会い、場合によつてはこちらで保護した方がいいだろう。

私達はオーレリアを捜索し、彼女に連絡を取ることにした。

2 ハートのQ^{クイーン}、眞実を知る

「カイ・ザクロが逃亡しました」

绚爛豪華なトパージエリア第二王子の部屋に、一人の兵士が駆け込んでくる。

その声に、派手なソファーに寝そべっていたこの部屋の主——トライア・トパージエリアがゆっくり起き上がつた。あかねいろ銅色の長い髪がさらりと流れ、彼が身につけていた大量のアクセサリーがジャラジャラと音を立てる。

「……へえ、それで？」

金色の瞳に気だるげな光を浮かべたトライアは、どうでもいいと言わんばかりに髪をかき上げながら、兵士に話の続きを促した。

「追つ手を出しておりますが……なにぶん、すばしつこく」

「情報を持ち逃げする気かな？ 今更逃げ出したところで、既にすべてが手遅れだと思うけど

……」

そう言つて、トライアは整つた口の端を吊り上げる。

「見つけ次第、始末といつて。あ、そーだアサギは？」

「アサギ様は、まだこちらに」

「じゃあさ、ちょおつと頼まれてくんない？」

トライアは、部下に命じてすぐにアサギを部屋へ呼び寄せた。

しばらくすると、無表情のアサギが室内に入ってくる。カイと一緒に逃げる道もあつたというのに、どうあつてもフラウを見捨てられないのだろう。アサギはフラウの幼馴染であり、彼女に恩があるのだそうだ。

心労からか、彼の赤い髪は乱れ、ダークレッドの瞳は生氣を失っている。

そんなアサギに向かつて、トライアは煽るように声をかけた。

「ねえ、アサギ。新しい仕事だよー」

「ふざけるな……お断りだ。フラウは無事なのか？ さつさと彼女を解放しろ！」

「つれないなあ、フラウなら別室でのんびりしているつてばー」

「鎖に繋いで牢に閉じ込めているくせに、よく言う」

「ほんっと、君達って第二王子に対して不敬だよねー。まあいいや、君の行動次第ではフラウを解放してあげよう。僕つて優しいから」

トライアの言葉に、嫌そうに顔を歪めたアサギが聞き返す。

「行動とは？」

「うん、ちょくつとき……過激派の兵を率いてガーネットまで行つてきてくれないかなあー？」

「いい加減にしろよ！ つい最近、ガーネットにちょっとかいをかけて追い払われたばかりだろう！」

「そんな冷たいこと言わないのでよお。あんまり酷いこと言うと僕、フラウに八つ当たりしちゃうか

もー」

そう言われたアサギは、憎々しげにトライアを睨みつつも素直に口を噤んだ。

「あはは、わっかりやすーい」

笑いながら、トライアは思考を巡らす。使い勝手がいいのは、魔力量が多いだけのフラウではなく、それなりに魔法知識があるアサギの方だ。彼の学園での魔法実技の成績は、常に首席のカミーユの次だつた。フラウは魔力こそ膨大なもの、単純な魔法しか使えない。

だつたら、フラウの魔力をアサギに渡した方が効率が良いだろう。フラウを押さえている限りは、アサギがこちらに牙を向けることはない。それにしても……

「あーあ。馬鹿兄貴が余計なことしてくれたせいで、仕事が増えちゃつたよ。ベアちゃんを隣国にやる気なんてなかつたのにさ」

兄である第一王子とトライアは、次期王位を巡つて争つている間柄だつた。

「いくら俺の戦力を削ぎたいからつて、普通第二王子の護衛を隣国の王子と婚約させる？ しかも、ベアちゃんは伯爵令嬢にすぎないのに。まあでも、いいよいよ。兄貴がロイスに肩入れするなら、俺はもう片方に肩入れするまでだもんねー」

トライアが、むくれつつかアサギに今後の指示を出す。アサギはしぶしぶそれを了承し、ガーネットへ発つ準備を始めた。再び、ワズーリ子爵領を落とすために

自國の領土にちよつかいを出されたガーネット側は、戦力の多くを平民過激派制圧に向かわせるだろう。そうすれば城は手薄になる。

その間に、ガーネット王を唆してロイスを引っ張り出すのだ。王太子さえ押さえれば、あのダメダメ王国は落ちたも同然である。

アサギのいなくなつた部屋で、トライアは独りごちる。

「その際、ペアちゃんとカミーユは回収させてもらおう」

カミーユといえば、以前、彼女がトパージエリアに来た痕跡こんせきがあった。

地下牢の一件で、なにをどうしたのか魔法薬の存在に気付き、そこからトライアに辿り着いたようだ。

「可能性のひとつとして予想はしていたし、罠も張っていたけれど……やっぱり、彼女の能力は貴重だなあ」

カミーユは性格も魔力の強さも、トライアの好みだった。その上魔法知識にも長けているなんて、とてもつもない優良物件である。フラウの魔力と組み合わせれば、きっと最強の手駒てこまになってくれるだろう。

トライアが初めて彼女の存在を知ったのは、当時十歳だったフラウから、とある話を聞いた時のことだ。フラウはその頃、トライアの部下であるフィオル・シントロンの家の養子やうしやくだった。

『あなたはダイヤのK、攻略対象なのよ！』

『は……？』

フィオルに連れられて城にやつてきた子供のフラウは、開口一番に意味不明な言葉を発した。

その隣で、フィオルが焦つたようにトライアに無礼を詫びる。そんな彼の手には、ところどころ

にキラキラした石が貼り付けられている白い物体が握られていた。

『これは？』

『ゲーム機よ！ 誰のものかわからないけれど……趣味の悪いデコデコ仕様』

トライアが尋ねたところ、フラウはその物体を弄りながら得意げに説明を始めた。だが、トライアには「ゲーム機」という言葉の意味がわからない。

しばらくすると、謎の物体の四角い窓に似た部分に絵が映り、音楽が流れた。驚いてフィオルの方を見ると、彼は困ったような表情で説明を始める。

フィオル曰く、この物体はシントロン家がトパージエリアで発見した魔法アイテムの一種で、使い道がわからなかつたため倉庫に眠つていたものだそうだ。それを発見したフラウが試行錯誤しこうさくの末、操作してみせたのだと。窓の中に現れる絵に、自分達らしき人間が登場することを不安に思ったフィオルは、同じく絵の中に登場していたトライアのもとへこの魔法アイテムを見せにきたのだとだつた。

トライアは、映し出された絵をまじまじと見つめる。フィオルの言う通り、絵の中にはトライアやフィオルがいた。しかも、あろうことか自分は、フラウに愛を囁きながら微笑んでいる。

——なんだ、これ。気持ちが悪い。

父や兄を出し抜き王位を狙つてゐる描写は、まるで今のトライアの心を映し出したようだつた。

見た目だつて、このまま時を重ねていけば将来はこうなるであろうという姿だ。

フラウに聞けば、これは未来を示すものだと言うではないか。そして彼女は、自分のことを「私

はこの世界を正すべく別の世界から派遣された存在だ」と告げた。

それを聞いてどうにも気分が悪くなつたトライアは、この物語とやらに反発することにしたのだ。試しに口調や行動を変えてみると、面白いくらい周囲の反応が変わる。次期王位争いでトライアを目の敵にしていた第一王子の派閥の貴族達からは阿呆王子認定され、見向きもされなくなつた。そんな時に出会つたのが、伯爵令嬢のベアトリクスだ。彼女も、あの魔法アイテムの内容を知って未来に反発しているのかと思うほど別人ぶりだつた。まるで自分の姿を見ているように感じてベアトリクスに好印象を持ったトライアは、彼女を護衛に迎え入れる。

その後、フラウに見せられた絵の中に登場する人物を、トライアは一通り洗い出した。全員の身辺調査をすると、どうにもおかしな人間が数名いる。それは、いずれもQ^{クイーン}と呼ばれる敵役の令嬢達だつた。フラウ曰く、彼女達も自分と同じ世界から来た可能性が高いということらしい。中でもカミーユという令嬢は、意味のわからない変化を遂げていた。

恐らく未来を知つてはいるはずなのに、フラウのように軌道修正しようとも、トライアやベアトリクスのように反発しようともしない。彼女はただ、思うがままに大好きな魔法を極めていた。全く未来に翻弄^{ほんろう}されないカミーユの生き方に、トライアは興味を持ち始める。

そして、十六歳の時にガーネットで開かれた舞踏会で直に見た彼女は、噂通り全身魔^{マジック}法刺青^{アーティファイア}まみれで……我が道を行く姿に、トライアは感動すら覚えた。

しかもカミーユは、その舞踏会で将来自分を破滅^{はめ}に追いやる人物と婚約する始末。そんな彼女の様子は、傍目^{はため}に見ていて最高に面白かつた。

トライアは、自分の享樂^{きょうらく}的な性格を自覚している。フラウの言う未来に反発し出してからは、更にその傾向^{けんじょう}が顕著^{けんちよ}になつた。

フラウの「革命」^{（マジック）}という名のお遊びに付き合いがてら、トライアはカミーユをなにかと構うようになる。彼女が傍^{そば}にいてくれれば、この鬱屈^{うつづつ}した気持ちをどうにか出来るのではないかと思ったのだ。もちろん、カミーユの魔法知識や技術も、ぜひとも手元に置いておきたいものだつた。邪魔な父や兄を倒し、王位を手に入れるという未来のために。

「さてと。あとは向こうにいる『彼』と『彼女』に連絡を入れておくだけだよね」

そう言つて、トライアは部屋の中で一人ほくそ笑んだ。



ガーネット城内の東棟の一室で、ベアトリクスは先程聞かされた事実を拒絶するかのようソフナーに躊躇^{うすま}つていた。未来の王妃のために用意された部屋の窓からは、明るい陽の光が差し込み、彼女の端整な横顔を照らしている。

そんなベアトリクスの傍には、心配そうな表情を浮かべたロイスが立つていた。彼は傷心の婚約者^{いた}を労^なわるみたいに、優しくその背を撫^なでている。

「気分はどうかな、落ち着いた？ ベアトリクス」

ソフナーを動かないベアトリクスから、ロイスは離れない。彼はずつと、気遣いに満ちた声を彼

女にかけていた。

不安に覆われたベアトリクスの心に、ロイスの優しい言葉が深く浸透する。

「すまない、ロイス。みつともない姿を見せてしまった」

「ううん、僕こそごめん。本当のことを話せば、ベアトリクスを傷つけるつてわかつっていたのに」

「そう言うと、ロイスは美しく澄んだエメラルド色の瞳を悲しげに伏せた。

「なんでロイスがそんなにも辛そうな顔をするんだ。これは私自身の問題なのに」

カミーユ達の言うことが本当ならば、トライアはガーネットに喧嘩をふつかけたことになるのだ。

第二王子の元護衛ごえいであるベアトリクスの今の立場は、微妙である。

トパージエリアにいたころ、運命に抗い孤独に戦っていたベアトリクスを迎えてくれたのは、トライアただ一人だった。それなのに——彼にとつての自分は、簡単に切り捨てられる人間だったのかと思うとやりきれない。

「ベアトリクス……？」

ロイスの戸惑とまどつているらしき声に、ベアトリクスは自分が涙を流しているのだと気付く。

（だ、ダメだ——こんなところで、泣き出すなんて！ 私は泣くようなキャラじゃないんだ！）

慌てて涙を止めようとしたベアトリクスだが、意思の力ではどうにもならなかつた。

「……うん、辛いよね。トライアはベアトリクスの大切な元主おもじだものね。泣いてもいいよ、ここなら僕しかいないから。あんまり溜め込むと心が麻痺まひしちやうよ？ 僕みたいに」

——ロイスみたいに？

ベアトリクスは、ハツとしてロイスを見た。周囲の人間から裏切られ続けてきた彼には、今の自分の気持ちがわかるのかもしれない。

「僕は、誰になにをされても大抵平氣だけれど……ベアトリクスによると、それはおかしなことのようだから」

「ロイスは変だ、こんな思いを抱えて平然としていられるなんて……！ 大体……っ!?」

尚も言い募まわろうとしたベアトリクスを、ロイスが強く抱きしめる。驚きで、ベアトリクスは言葉どころか思考を停止させた。

「大丈夫、僕がいるよ。カミーユ達もね……皆、ベアトリクスの味方だ」

不覚にも、彼の言葉に再び涙が溢れる。

「ロイス……っ」

少し前まで恨み続けていた相手に、簡単にほだされるなんてどうかしている。

けれど今の不安定なベアトリクスは、ロイスの言葉に酷く安心を覚えた。



トライアの一件をベアトリクスに告げた数日後。この日も私は白のローブを身に纏まといい、ロイス様の傍そばに待機していた。ロイス様を挟んだ反対側では、アシルが補佐の仕事をこなしている。今日は、オーレリアが城へ来る日なのだ。私やベアトリクスがオーレリアに会いたがつたことや、

平民過激派に彼女が狙われるかもしれないことから、ロイス様がアシルを通じてオーレリアを探し出し、城へ呼び寄せたのである。

しばらくすると、王太子の謁見室に緊張した面持ちのオーレリアが入ってきた。相変わらず黒髪お下げに眼鏡姿の彼女だが、服装は初めて見る私服で、紫色に金銀豹柄の上品かつオシャレ……かもしれないドレスを着ている。肩の上に巻かれた虎柄のショールも特徴的だ。

以前会った時はメイド服姿だったのでわからなかつたが、オーレリアは独特的のファッションセンスの持ち主なのだろう。

「ひ、ひさしひりですー、アシル様にカミーユ様。急にこんなところに呼び出されて、緊張するわあ！」

「オーレリア、久しぶり！ 来てくれてありがとうございます！ ベアトリクス、彼女がオーレリアだよ」私の言葉に頷いたベアトリクスが、オーレリアへ向き直って話を始める。

「はじめまして。あの、私達と同じ世界出身の方だとお聞きして……以前からお会いしたいと思っておりました」

「もおー！ 未来の王妃様なのに、そんな気いつかわんでええですよおー！」

オーレリアは、大きな口を開けてからからと笑つた。元気そうでなによりだ。

彼女の様子を見て、コーラルレッドのドレスを身に纏つたベアトリクスが、そろりと私に戸惑いの目を向けた。気持ちはわかる。

元の世界ではかなり年上だったオーレリアには、普通なら敬語を使うべきなのだが……この世界

で身分が上なのはこちらである。とはいえる、オーレリアはいつもこの調子なのだ。

「で、で？ カミーユ様、私はなんでお呼び出されたん？」

「実はね、オーレリア……あなたの身が危険に晒されるかもしれないんだ」

私は、彼女にヒロインのことや現在のトパー・ジエリアについての話をした。

オーレリアに危機が迫る可能性があることも正直に伝えたのだが、彼女は「知らないうちに大変なことになつたものだ」と他人事のように驚くばかりだ。全く動じていない様子である。

「心配せんでも、私は大丈夫やで？ 手を出したところで、敵さんにもメリットがないやろ。平民女一人よりも国全体を優先するのは当然やし、私なんて人質にもなれへんわ」「でも、もしオーレリアの身になにかあつたら……！」

「あはは、心配性やなあ。カミーユ様は」

オーレリアは笑つて私の話を否定する。そして、静かに言葉を紡いだ。

「私は、カミーユ様達の保護は望まんよ。やりたいようにやらせてもらう。それでなにかあつても、全部私の自己責任や」

どう言つても頑なに意見を翻さないオーレリアだが、彼女の言い分は、ある意味正しい。

私がどう思つていようと、オーレリア自身の価値が人質にもならないものだというのを事実だつた。それに、強引に彼女を保護してしまえば、オーレリアはかなりの制限を受け、医療を学ぶ学校にもきっと自由に通えない。

私は、彼女にこれ以上言うことが出来なかつた。

「では……定期的にこちらに顔を出してはもらえないだろうか。もしくは使いをやるので、近況を聞かせてもらうというの？」

困っていた私の横から、ベアトリクスが控えめに提案する。彼女も、同じ世界出身のオーレリアを気にかけているのだろう。

「カミーユ嬢も安心するだろうし、私もあなたと親しくなりたい。護衛をつけるのは嫌だろうから」

「……まあ、それくらいやつたら。護衛はカンベンして、気い使うから」

オーレリアは、あまり仰々しいのは避けたいそうだ。

「それじゃあ、また顔出すわ」

そう言つてオーレリアが帰ったあと、王太子の謁見室で私とアシル、ロイス様とベアトリクスの四人で話をした。

「インパクトのある女性だつたね」

そんな感想を漏らすのはロイス様。確かに彼が目にする令嬢達の中には、あのようなタイプはない。

結局、オーレリアには内密に二名の護衛をつけ、あとは定期的に会うことになった。

「ふふ、さすがベアトリクス。いい提案だつたよ」

キラキラとした笑顔を振りまくロイス様は、ずっとベアトリクスと手を恋人繫ぎしている。

ベアトリクスは手を解きたそうにしているが、無理に振り払う様子はない。以前よりも親密に

なつてゐる一人に、私はほつと胸を撫^{なで}で下ろしたのだつた。

それから数日後、オーレリアの次は、学園長が城へ来ることになった。

またしてもロイス様とアシルが、彼に約束を取り付けてくれたらしい。

お礼を言った私に、二人は軽く答えた。

「いいんだよ、僕も彼に会いたいし。あの魔法アイテムで見たところ、学園長は重要人物だから」

「俺も同意見です……かなりの要注意人物ですね」

学園長が会いに来てくれるなんて嬉しいことだ。彼と魔法について話したいことがまだまだたくさんある。

謁見室に現れた学園長は、オーレリアの比ではないくらいに緊張していた。無理もない、彼はそう頻繁^{ひんぱん}に学園から出ないので。それがいきなりこんな場所へ呼び出されたのだから、緊張もするだろうと、少し申し訳なく思う。

学園長は、戸^{とまど}惑いに揺れるミステリアスな金色の瞳で私とベアトリクスをチラチラと見て呟いた。

「ふおう……び、美少女キャラが一人！」

彼の言うことは、今日もよくわからない。

謁見のために美しく着飾つたベアトリクスは、ロイス様の隣にいる。最近の彼女は、城内の行事に積極的に参加するのだ。

「学園長！」

「カ、カミーユ……！」

私が声をかけたところ、学園長が縋るような目でこちらを見た……が、その視線は一人の間に割り込んできたアシルによって遮断される。

「ア、アシル……？」

「カミーユ。今日は殿下から学園長に大事な話があるから、しばらく後ろで控えていてくれる？」「あ、うん。わかつたよ」

私が疑問符を浮かべていると、ロイス様が学園長へ語りかけた。
「来てくれてありがとう、学園長。今日はこれを返ししたくて……貴重な魔法アイテムをありがとう」

「へ？ 魔法アイテム……ああ、は、はい、あれのことですね？」

魔法アイテムという言葉に、一瞬不思議そうな顔になつた学園長。けれど、私がゲーム機を魔法アイテムと呼んでいるということに気が付いたみたいで、話を合わせてくれる。
「急に呼びつけて申し訳ないね、どうしても直接お礼を言いたくて。僕もカミーユも、今は敵に狙われていて自由に外を歩けないものだから……」

爽やかに微笑むロイス様に、学園長は目を丸くした。

「カミーユも、外出に制限がかかっているのですか!?」

王太子用の椅子に腰かけるロイス様の後ろから、私は学園長に頷いてみせる。

「そ、そ、なんだ。色々とあつてね……」

ロイス様の隣の席には、もうすぐ王太子妃となるベアトリクスが静かに座つていた。そんなベアトリクスと手を繋いだロイス様は、キラキラした目を学園長に向いている。
「それで、少しあなたに話を聞きたいのだけれど……」「僕に!?」

ロイス様の言葉に、学園長は急に挙動不審になる。

「あ、あの……僕は中立の立場として、あなただけに肩入れするわけにはいかないのです」「それは知つていてるよ。だから、話せる範囲で構わない」

学園長は尚も首を縦に振らない。ところが――

「カミーユの安全のためにも、ぜひあなたの知つている情報が必要なんだ」

そのロイス様の言葉に、学園長は心を動かされたらしい。

「わかりました、美少女の安全のためなら……！」

案外チョロかつた学園長は、大きく頷くと、彼の知つている平民過激派の情報を話してくれた。
元生徒にここまで協力してくれるなんて、やっぱり彼はいい人だ。

けれど、これで学園長は完全に「中立」ではなくなつてしまつた。それが申し訳なくもあり、複雑な気分になる。

学園長の来訪を受けた翌日、私はメイの部屋へ向けて伝達魔法でピンク色の蝶を飛ばした。メイも、私達と同じ悪役令嬢になつてしまつた異世界人。彼女は王弟の息子であるライガの妻で、現在

妊娠中なのだ。

『メイちゃん、これから部屋に行つてもいいかな？』

今時間は夜。ロイス様の護衛の交代を終え、私は城内に設けられた私室に帰つてきていた。王太子の護衛は「人体制だ」。一人で二十四時間寝ずに護衛をするわけにはいかないからである。

すぐに、メイが返信をくれた。伝達魔法の基礎は学園の授業で習つたので、彼女も使用出来るのだ。

私は、メイから届いた伝達魔法を読み解いた。

『わあ！ 来てくれるのですか!? ダメ元でお願いしてみてよかつたです！』

実は今朝、話をしたいことがあるとメイに言っていたのだ。

しかし、護衛中にロイス様の傍を離れるわけにもいかないので、こんな時間になつてしまつた。

私は一階の中庭が見える夜の回廊を進み、西棟へ向かう。この季節、月を見上げて咲く秋の花で

覆われた中庭はなんだか情緒的だ。王宮名物の秋薔薇の薔薇も、もうすぐ開きそうである。

西棟の階段を上り、メイの部屋の扉の前までくると……扉の前に、十数人の屈強な男達が立つていた。護衛に就いている、ライガの騎士団の面々だと思われる。恐らくライガの指示だろうが、かなりの厳戒態勢だ。

騎士達に案内されてメイの部屋に入ると、彼女はベッドに腰かけて果物をつまんでいた。寝間着の下腹部がふっくらと膨らんでいるのがわかる。メイのお腹は、少しずつ大きくなつていてるようだ。

「メイちゃん、遅くなつてごめんね」

「いいのよ、お姉様。私が無理を言つて頼んだのですもの。本当は私が出向くべきなのに」

「気にしないで、メイちゃんは妊娠中なんだから。無理させたら、私がライガ様にしばかれるし」

「当たり前だ。妊娠中のメイに出向かせるなど俺が許すはずがないだろう」

「え……!?」

少し低めの声と共に、メイの横からずいつとライガが現れる。天蓋付きベッドのカーテンに隠れて見えなかつた。

「ライガ様、そこにいたのですか。カーテンの陰で気配を消すなんて、ロイス様みたいですね」

そう言うと、ライガは実に嫌そうな顔をする。今度から奴をからかう時は、この方法も使えそうだな。私は、ライガから見えない角度でほくそ笑んだ。

「実はね、お姉様に会つてもらいたい人がいて

メイの言葉と同時に、ライガの後ろから更にもうひとつ人影が現れた。

「え、嘘……カイ!?」

それは、メイの双子の弟であり、ライガの部下でもあつたカイだ。

黒い軽装に身を包んだ無表情の彼は、ライガの陰に隠れるようにしてこちらを見つめて……いや、睨んでくる。相変わらず、私は彼に好かれていないらしい。

以前、ロイス様の誘拐事件に加担したカイは、逃走して行方をくらませていた。

ライガの話では、こちらの味方として敵陣營に留まり単独で動いていたとのこと。そんな彼がこ

こにいるなんて、一体どういうことなのだろう？

「なんで、カイがここにいるのですか？」

驚いた私は、仮頂面で壁にもたれているライガに問いかけた。私はまだカイを全面的に信用していない。

「帰ってきたからだ。貴重な情報を携えてな」

「……どうのことですか？」

「え、あ、はい。わかりました」

ライガは、メイを部屋の外へ促しながら答える。

「俺は、メイを連れて少し席を外す。詳しくはカイから聞け」

「え、あ、はい。わかりました」

私は、わけがわからないまま返事をした。一体、なんだというのか……？

メイ達が部屋を出たことを確認すると、カイはたどたどしく口を開き始める。

「俺のしたことは、無駄ではなかつたようだな。応えてくれたことに感謝する」

そう言うと、カイはメイと同じ猫のような目で私をチラリと見た。言葉の意味を理解出来ない私は、彼に聞き返す。

「カイのしたことってなんなの？」

「図書室に印を残した。お前は、それを元に禁術を読み解き、解除したと聞いている」

「指の跡を最初に見つけたのは、ロイス様だけね」

カイが言っているのは、図書室の禁術書が置かれていた場所に残されていた不自然な指の跡のこと

とだろう。ライガが言つていた通り、カイはこちらの味方として動いていたのか。けれど、ロイス様を攫つたのもカイなので、簡単に彼を信用するわけにもいかない。

私が警戒していることを察知したらしいカイは、肩を竦めながら話題を変えた。

「俺が『メイ』の異変に気付いたのは……五歳の時だ。急に弟である俺のことがわからなくなつたメイは、ここはどこかと泣き喚いた。意味不明な単語を連発した挙句……邸の中にいるというのに家へ帰りたいと言つ」

いつもよりも流暢に話すカイの言葉を、私は黙つて聞いている。

それはもしや、本物の「メイ」と、今のメイの中身が入れ替わった瞬間なのではないだろうか。彼女はやはり幼い段階でこちらの世界へ来たのだということが窺える。

「子供に無関心な親や使用人達は、幼少期の出来事だからと楽観視していたが、あきらかに様子が変だつた。だから、俺はそいつの名前を聞いたんだ。『メイ』に代わつてそこにいる『誰か』に。そうしたら……」

カイの問いかけに、「誰か」は素直に答えたらしい。「メイ・ザクロ」とは全く別の「ウメイエ・アオイ」という、この世界の人間らしからぬ名前を。

「俺の予想は正しかつた。目の前にいたのは姉とは別人の、姉の皮を被つた『誰か』だつた。でも、不思議と彼女に対しての恐怖や嫌悪感は湧かなかつた。俺と姉の『メイ』は、元々互いに関心がなく、二人でいても別々に遊んでいるような子供だつたから……」

ゲームの中に出てくる本来のメイは、大人しくてミステリアスなタイプで、人懐っこく明るい今

のメイとは正反対の性格だ。それにゲームの中のカイとメイの関係は淡白なものだつたが、今の一
人は仲が良い。

「俺がライガ様の側仕えになつて更に数年が経過しても、アオイが以前の『メイ』に戻る兆候は見
られなかつた。そんな時、俺はお前の存在を知つたんだ……」

カイが言つているのは、私と彼が初めて出会つた日のことだろう。あの時、カイに刃物を向けら
れた出来事は、今でも記憶に残つている。

「お前は、アオイのことを『大人しくてミステリアスな子に見えた』だなんて言つた。その上、
『いきなり性格が変わつたとかじや』などと……」

「そういえば、そんなことを言つた気もする」

「俺しか知り得ない事実を知つてゐるお前を、訝しく思つた俺は……それとなくお前のことを見察す
るようになつた。アオイがお前に懐いたので、警戒の意味も込めて」

「どうやら知らぬ間に、私はカイに観察されていたらし。全くわからなかつた。
観察してて気付いたのだが……お前は、時々アオイと同じ聞き慣れない単語を口にした。それ
もあつて、俺はますますお前を怪しんだんだ」

恐らく、元の世界にしかないものの名前などだらう。私やベアトリクスは、元の世界の単語を
うつかり使つてしまふことがたまにある。

「幼いころは、家に帰りたいと泣き喚いていたアオイだが、時が経つにつれて、彼女は次第に元の
自分を忘れていった。『メイ』の姿になる前のアオイ自身の記憶を、夢かなにかだと思ったのかも
うつかり使つてしまふことがたまにある。

「……」

幼い時にこちらの世界に飛ばされ、記憶を共有出来る人間がいなかつたメイがそう考えるのは不
自然ではない。私は、幼いころのメイの行動や、彼女に元の世界の記憶がないことに納得がいつた。
「更に月日が経ち、アオイ——メイと俺は十三歳になつた。いつしかメイを見るライガ様の目が、
以前とは違うことに気がついた。彼の眼差しは部下や妹分に向けるものではなかつたし、目を輝か
せながらライガ様を見つめるメイの表情も、以前とは僅かに違う。その光景に、俺は不安になつた
んだ……そんな俺の心配をよそに、しばらくして二人は付き合い始めた」

カイの心配もわかる。ライガは王弟の息子であり、男爵家の令嬢でしかないメイとは身分が釣り
合わない。更に、国王派と王弟派の争いの中で、ライガもロイス様と同様に命を狙われたことが
幾度となくあるだろう。ライガの恋人になることでメイまでもが狙われ、危険に晒される可能性は
あつた。

「俺が予想した通り、しばらくしてメイは王弟派の令嬢に執拗な嫌がらせを受けるようになつた。
時には怪我をさせられたり、毒を盛られたりもした。ライガ様や俺がいる時は未然に防げるが、い
つもメイの近くにいられるとは限らない。俺がその状況に焦りを覚えていたころ……あの事件が起
こつた」

ある時、カイは偶然、王弟がメイの排除を検討しているという情報を掴んだのだという。
ライガの父親である彼は、ライガの婚約者に国内の大貴族の令嬢、または外国の王女を迎えていた。
ようど画策していた。